

令和 4 年 6 月 4 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00157

研究課題名(和文) 水運を利用した南北朝から隋朝への石刻書法の伝播 篆書の墓誌蓋に注目して

研究課題名(英文) The propagation of stone engraving from Southern and Northern Dynasties to Sui used water transportation.-Focus on the Lid Epitaph of Seal Script-

研究代表者

東 賢司 (HIGASHI, Kenji)

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：10264318

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では墓誌蓋の篆書の書体に着目し書法の伝播を証明しようとした。特に墓誌蓋の流行が始まった北魏に着目し、篆書の墓誌蓋銘の中で同筆と思われる資料を分析した。結果として、墓誌蓋は同一の人物が揮毫したものと推定できた。また、北朝から隋の篆書の墓誌蓋銘には『説文解字』を参考に書かれているものがあり、これを標準的な作例とすることができた。一方、蓋銘が標準的であっても、その対となる墓誌銘の文字も標準的であるとは言えなかった。さらに、墓誌銘中の六言・四言の詩句を比較しグループ化を行った。語句の継承がされているが、書風の共通性は見いだせず、撰文と揮毫は別の仕組みで行われている可能性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本論は、現代社会まで繋がっている隋代楷書書法の伝播は北朝の特定の王朝で行われ、水運を利用して技法の伝播が行われたことを明らかにした。社会的なインパクトとしては、墓誌蓋の変化に注目し、北魏を起点とし北斉、隋と、製作技術や書体の伝承が行われたこと、北魏以降の華北平原では水運が発達し、石刻出土地と河川の位置関係から物理的に水運による移動が可能であることを証明した。また、学術的なインパクトとしては、南北朝末から隋代は既に「楷書」の時代であるが、篆書は長期間文字構造を変えずに存在し、蓋石からは北朝から墓誌の技術が伝播したということが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to prove the spread of calligraphy by focusing on the seal script on the tomb cover. Particular attention was paid to the Northern Wei, where the popularity of tombstone covers began, and material from seal inscriptions on tombstone covers that appear to be by the same author was analysed. As a result, it could be assumed that some of the tombstone covers were written by the same person. In addition, some seal script tombstone cover inscriptions from the Northern Dynasty to the Sui Dynasty were written with reference to the Xuewen Jiaozhi, which could be taken as a standard example of this work. On the other hand, even if the cover inscriptions were standard, their counterpart tombstone inscriptions could not be said to be standard either. Although the words and phrases were inherited, no similarities in style could be found, and it became clear that the composition and writing of the inscription may have been carried out under different mechanisms.

研究分野：人文学

キーワード：墓誌 墓誌銘 墓誌蓋 篆書 楷書 北魏 隋 水運

## 1．研究開始当初の背景

### (1) 隋唐楷書成立の過程

中国書道史上最も注目されるのは、隋唐の楷書成立の過程である。隋代の楷書は、直近の王朝であった北朝北周や南朝陳の影響を受けたのかを明らかにする。

### (2) 墓誌蓋の分析

墓誌や造像等は土中や墓葬から出土する第一次資料であり、故人の生涯が克明に記録される。出土資料中では圧倒的に情報量が多いが、文字数が少ない墓誌蓋は従来ほとんど注目されることはなかった。また北魏の時代から蓋は篆書、誌は楷書が多く、使用される書体の差が生じているが、篆書は既に時代遅れの書体として扱われた。しかし、墓誌蓋と墓誌石が別に作成されているとすれば、篆書の文字も重要な意味を持つと考えた。

## 2．研究の目的

### (1) 隋代書法の源流は北魏にあり

隋代は、現代に通じる新しい楷書体が成立するが、誕生の理由として南朝と北朝の文化が融合しこれを作りあげたとされている。本研究は、墓誌蓋の変化に注目し、北魏を起点とし北齊、隋と、製作技術や書体の伝承が行われたことを証明する。

### (2) 書法の伝播には水運が利用された

墓葬は都の周辺に作られるが、洛陽、鄴(河北省磁県と河南省安陽の間)、西安は遠く離れ個別の文化や技術を保持していると考えられてきた。ところが、北魏以降の華北平原では水運が発達し、物資の移動には小規模な河川を利用していることがわかった。石刻出土地と河川の位置関係から物理的に水運による移動が可能なことを証明する。

## 3．研究の方法

本研究の目的は、隋代楷書の伝播が北魏を起点とする特定の北朝王国で行われたことを証明することにある。期間内に以下の点を明らかにする。

### (1) 古代河川・水路と石刻資料出土地の明示

発掘報告、博物館収蔵品、民間所蔵品から墓誌原石の文字・書体を抽出し書風の変化を明らかにする。

### (2) 石刻資料から見る人の移動の解明

数千件を超える人の出入りに関する情報を電子化し、特に石刻資料のみで確認ができる情報である女性の婚姻から、部族間の繋がりを明らかにする。

### (3) 「水運」による石刻資料運搬の証明

水路は兵站により整備されたが、小さい河川では平常時には生活物資の運搬を行うための水運業が発達していたことを証明する。

### (4) 篆書から見える北朝の文化伝播の立証

墓主の死亡から埋葬までは平均 90 日程度と短い。墓誌と墓誌蓋は短期間にしかも同時に作られたことを前提にすると、篆書の技法伝播は楷書の伝播にも繋がることを証明する。

## 4．研究成果

### (1) 北魏の篆書墓誌蓋銘の分類

北朝時期に作成された墓誌蓋は221件、その中の70件が北魏資料である。この70件には、楷書と篆書で書かれた題字(蓋銘)が見られ、楷書が優位であることが確認できた。篆書が用いられた蓋銘は多くは洛陽で作成されている。

#### (2) 同じ揮毫者による蓋銘の存在

篆書の蓋銘には同筆と思われる資料がある。これら进行分析した結果、墓誌蓋は同一人物が揮毫したが、彫刻した人物は同一ではない、墓誌銘を撰文、揮毫、彫刻した人物は同一ではない、銘石と蓋石が同じ場所で作られたという可能性は低い、ということが明らかにできた。

#### (3) 標準的作例の有無

北魏以降に見られる篆書墓誌蓋の文字に注目し、これらの中で標準的作例と言える資料が見られるのかを確認した。体系的な篆書資料である『説文解字』と比較し、地上に立てられた墓碑・徳政碑等には標準が設定できないが、墓誌蓋銘では設定が可能であると結論を得た。

#### (4) 『説文』と一致する墓誌蓋銘の価値

墓誌銘には少数ではあるが『説文』と八割近い一致率があるものが存在する。これはたまたま一致をしたのではなく、この蓋銘を書いた揮毫者が、『説文』に関する知識を有していたとも捉えることができる。石刻資料から確認できる北朝当時の篆書の多くは、『説文』とはやや異なっており、当時の篆書感なるものは、後漢の許慎のそれとはやや異なっていたと思われる。『説文』と一致した文字を揮毫できたことは、何らかの他とは異なる環境が必要ではなかったのかと推察できる。更に、北朝期においても『説文』が篆書の基準だとすれば、この資料は標準となる資料と考えることができ、種々の比較をする上での意味合いは大きい。

#### (4) 蓋銘を持つ墓誌の銘文のグループ化

篆書で書かれた墓誌蓋銘を持つ資料の銘文の撰文者に注目し、字句を調査してきた。結果として以下の4点が得られた。北魏の篆書の墓誌蓋を持つ墓誌のみならず、北魏洛陽遷都直後の墓誌にも字句の一致は確認できるが、一致数は、数件から数百件と差が大きい。グループを跨ぐ資料はあるが、篆書の墓誌蓋を持つ墓誌を基準とするグループを形成することは可能と思われる。他者の(複数の)銘文から引用をしているものが見られるが、異なる字句を求めたり、一つの銘文から集中的に引用をする違いがある。また、引用句の配置方法としては、全体に字句を配置する場合と部分に集中して配置する場合がある。どのグループも書風の共通性を見いだすことはできない。

#### (5) 蓋を持つ石刻の価値

篆書の蓋を持つ墓誌銘のグループ化を行うためには、蓋の有無に関わらず、墓誌の銘文を比較する作業が必要になると考えた。この比較作業の結果、共通性が極めて高い資料がある一方、重なりがほとんど見られない資料もあるという傾向がつかめた。この理由について、墓誌銘の撰文者が他の撰文者の銘文を参考にしたという可能性は否定できないものの、おそらく、何らかの参考になる文献のようなものが複数あり、これらからの引用の差によって、文言の共通性や相違性が生まれるのであろうという予想をした。

#### 引用文献

馬立軍『北朝墓志文体与北朝文化』(中国社会科学出版社,2015年)

林登順『北朝墓誌文研究』(麗文文華,2009年)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 東 賢司	4. 巻 15
2. 論文標題 墓誌のグループ化に関する試論 - 北魏の蓋を持つ墓誌の試石に刻まれる詩句を利用して -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 12
2. 論文標題 試作「楊鈞墓誌銘」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 1-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 14
2. 論文標題 篆書の墓誌蓋銘から見る標準作例の可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「元宝月墓誌銘」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 1-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「李略墓誌銘」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「(竹冠に句)景墓誌銘」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 60-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「元天穆墓誌銘」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 95-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「高公妻茹茹公主間叱地連墓誌」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 154-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「楽陵王高百年墓誌」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 190-216
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 11
2. 論文標題 試作「楽陵王妃斛律氏墓誌銘」訳注	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 217-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 13
2. 論文標題 篆書墓誌蓋銘の揮毫者について - 北魏の同筆墓誌蓋銘に注目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 5-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 10
2. 論文標題 試作「封之秉墓誌銘」訳注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 10
2. 論文標題 試作「辛穆墓誌銘」訳注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 27-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 東賢司	4. 巻 10
2. 論文標題 試作「元子正墓誌銘」訳注	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 愛媛大学書道研究	6. 最初と最後の頁 51-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 東賢司
2. 発表標題 墓誌のグループ化に関する試論 - 北魏の蓋を持つ墓誌の誌石に刻まれる詩句を利用して -
3. 学会等名 令和3年度 全国大学書道学会 香川大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 東賢司
2. 発表標題 篆書墓誌蓋銘の揮毫者について - 北魏の同筆墓誌蓋銘に注目して -
3. 学会等名 全国大学書道学会鳥取大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

東賢司公式HP  
<http://www.higashi-kenji.com/kenkyuuronbun.html>  
東賢司公式HP  
<http://www.higashi-kenji.com/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------